



特集

動物園と芸術

動物園の入園ゲート前に麒麟「たいよう」とその母モモの像「いっしょだよ」（命名、安藤素子さん浜田小学校）が設置されたのは昨年のこと、その作品が第22回秋田市文化選奨に選ばれました。この像は秋田市で金属工芸をなさっているサム工房佐々木勇さんが、国際ソロプチミスト秋田等の資金提供を受けて作成したものです。動物園は、動物たちとの出会いの中、命を感じる楽しい場所ですが、芸術のモチーフにあふれたユニークなところ。大森山動物園のグレードアップしてくれた「たいよう」像に続き、アートとともにある動物園もめざしたいものです。今回は受賞を記念し佐々木さんほかの数人の声をお届け致します。



▲ねん土でのモデル

サム工房主宰 佐々木 勇

平成16年2月頃、小松守園長が工房に何度か足を運んでくださり、麒麟像制作依頼の話が進んでいきました。

制作時間、その他難しい問題もありましたが、小松園長の「どうしても、ここに麒麟の親子像が欲しいのです。」との熱意に動かされ正式にお受けすることになったのは3月半ばの事でした。子供たちの夏休みにあわせて、除幕式の日程が決定され、それからは時間との戦いでした。

スケッチから粘土でのモデルを作り、鉄ワイヤー実寸大のモデルを形作り、それに合わせて銅版の打ち出しに入りました。パーツごとにタガネとハンマーで成形する鍛金、溶接をしていく方法です。

「麒麟のたいよう」というモデルにこだわらず、いかにデフォルメにイメージに近づけていくか、空間にデッサンしていく様な作業です。納期を意識しつつ、打ち続ける作業は精神修行のようでもありましたが、一枚の金属板が徐々に変化し、そこに存在感が現れ始めると不思議なことに、彼らが語り始めるという楽しいひとときでもありました。ですから、動物園に届けるときには、ちょっと道草をしたり小さな旅の形になりました。



▲モデルに合わせてカーンマーでガンガ



▲麒麟の中にはしっかり、ステンレスの骨が入ってます